



# 鹿児島県護憲平和 フォーラム情報

NO-28 2013.8.29

発行：鹿児島県護憲平和フォーラム E-mail:kenheiwa@bronze.ocn.ne.jp  
連絡先：鹿児島市鴨池新町5-7 TEL 099-252-8585 FAX099-258-4560

## 護憲・平和の現在とフォーラムの任務

鹿児島県護憲平和フォーラム

代表 井之脇 寿一



(井之脇寿一代表)

共同通信社が7月22・23の両日実施した電話での世論調査によると安倍内閣の支持率が6月調査の時より11.8ポイント下落して56.2%、不支持率は16.3%から31.7%と倍増したという。自民党が大勝した参議院選挙の翌日である。自民党に投票した多くの有権者は、改憲や原発のことよりも経済政策を念頭において投票したと思われる。他方、不支持の理由の最多29.6%が「経済政策に期待が持てない」(7月24日付南日本新聞)としているのは肯けるとしても、不支持率の増加は結果に反映されなかった。

大勝に気が緩んだのか、麻生副総理は7月29日、都内の集会で「(ドイツでは)ある日気づいたら、ワイマール憲法が変わって、ナチス憲法に変わっていた。誰も気づかないで変った。あの手口を学んだらどうかね」と発言した。内外からの批判にさらされ、8月1日には撤回し

たものの、改憲に対する本音と意欲が露わになった。

8月3日の新聞によれば、安倍首相は内閣法制局長官に小松一郎駐仏大使をあてる方針である、という。同氏は集团的自衛権容認論者であり、かつ「憲法の番人」とされる法制局長官に外務省出身者が起用されるのは異例とのことだ。いよいよ9条の外堀が埋まってきた。前任者が最高裁判事となり、就任会見で、憲法の枠内で集团的自衛権の行使を認めるのは困難としたことに少しだけ救いを感じる(21日付朝日)。世論調査を信じているのではないものの、これまでの憲法解釈を変えて集团的自衛権を行使することに反対が59%で、賛成の27パーセントを大きく上回った(26日付同紙)。護憲側にとっては、活用できる数字であろう。

自公の圧勝によって、国会では護憲が危機にあるが、その中で沖縄での社大党の勝利に護憲・平和についての県民の意思が表明されていること、また、東京で反原発の候補が当選したことは、大きく評価されるべきである。

宮崎駿監督が「風立ちぬ」の公開に際して、96条を改正しようというのは詐欺だとある冊子に書いていた(世界9月号メディア批評)のも大いに心強い。

選挙結果がどうあれ、護憲・平和そして反原発を志向するのが多数派であることに確信を持ちたいものである。

## 700 個の風船、北東の空へ —風船とばそうプロジェクト—

7月28日、『風船を飛ばそうプロジェクト』（九州川内訴訟弁護団主催）が、川内原発がある薩摩川内市久見崎海岸で行われました。県内はもとより九州各地からの参加もあり、300人余が結集。13時から川内原発と川内川河口にまたがる砂浜の海岸にウミガメの産卵状況の観察会も行われ、観察会にはこの地域の海亀パトロール監視員の中野行男さんや鹿児島大学「海亀研究会」のメンバーも参加し、参加者への説明風景がありました。



### ゼロノミクマくん（原発ゼロダンス）

集会は13時50分に開始、「風船プロジェクト実行委員会」の橋爪健郎代表が、「川内原発の放射性物質がどのように飛散するか、その具体化であり、この秋にも再稼働を目論む川内原発へ関心を持っていただくことだ」と述べられました。また、当日は、玄海原発の地元でも集会が開催され、同時刻に風船が飛ばされることが報告されました。

続いて、九州川内原発訴訟の森雅美弁護士（弁護団長）は、先般フクシマを訪問し「駅前に多くの自転車が放置されていて、それは通学の高校生などが、事故により帰れず放置されているものだ」と聞かされた、そして「住宅地は荒れ放題だった」と報告があり、原発は廃炉にしようかと訴えられました。

玄海原発訴訟弁護団の東島浩幸事務局長（弁護士）は、「過酷事故が起これば避難はできない、それに対応する計画もできない状況にある。福島では400台から500台の車が動いただけで渋滞が起こったことが語られ、玄海・川内訴訟を頑張ろう!」と訴えました。

続いて、玄海原発訴訟原告団の長谷川照さん（前佐賀大学学長）は、IAEA(国際原子力機関)か

らの勧告で、『過酷・過激な事故を想定して対策が完全にできることを規定している』が、日本の規制委員会は防災・避難など、それは電力会社、設置県、自治体がやることだとしている。賠償も電力会社や県、そして設置自治体を負うべきだと、早くも再稼働ありきの姿勢が見えていることが報告されました。

最後に、柳田真さん(再稼働阻止全国ネットワーク共同代表/たんぼぼ舎:東京)から、全国の原発で「再稼働反対」で頑張っている仲間12人と一緒に川内に来ました。「今日の行動の意義は大きい、秋の再稼働阻止へ向け頑張る!」「規制委員会は「北海道・泊原発、愛媛・伊方原発、そして川内原発」の再稼働を急いでいる」「規制委員会が再稼働の推進機関になっている感じさえ受ける」と厳しい口調で訴えました。

それぞれのあいさつや報告の後、最後に“ゼロノミクマくん”（緑色のぬいぐるみ:少年ということらしい?)の原発ゼロのダンスが紹介され参加者も全員で踊ろう!」と?（でもついていけず!）。

「風船とばそう!」は、川内川河口の河川敷に参加者全員並んで、佐賀・玄海原発の集会と同じ時刻にカウント・ダウンして、14時35分、約700個の風船は、参加者の手から一斉に放たれました。



### 大空に舞い上がる風船

放たれた700個の風船は緩やかな「南西の風」に乗って、北東の空へ(多分、川内市街地から出水市～伊佐市方面へ)、高く舞い上がった風船は5分程度で見えなくなった(後日、3時間後には宮崎まで飛んでいたとの報告がありました)。

## 被爆 68 周年原水爆禁止長崎大会へ 51 人が参加



長崎大会にバスで参加した原水禁鹿児島県民会議の皆さん

### 車（バス）中で事前学習

大会へは 8 月 7 日鹿児島市をバス 1 台 40 人（自家用車などで 11 人が別参加・総数 51 人）で出発、車中では荒川譲・団長（原水禁県民会議議長）から「学習資料」『原子力発電所のある地域・鹿児島に住んで』と、第 2 分科会で報告することになっている『川内原発再稼働阻止のとりくみ』について話していただきました。そして、今年の大会は 2005 年から続いていた「連合・原水禁・核禁会議」三者による統一大会とならなかったこと。それは〔3.11 フクシマ〕後に「原子力の平和利用」を掲げる核禁会議との溝が埋まらず、原水禁独自の大会開催となったことの経過なども報告頂きました。引き続き、被爆者である久保清子さん（当時 6 歳・小学 1 年/県被爆協）から、被爆当時の自らの体験を約 40 分にわたり話していただき、当時の壮絶な生き方に、車中もしくはばらくは沈黙する状況でした。

### 特別ゲストにオリバー・ストーン監督参加

大会 1 日目は、長崎ブリックホールで開会総会。特別ゲストのスピーチではオリバー・スト



### 特別ゲストのオリバー・ストーン監督（左）

ーン氏（米・アカデミー賞受賞映画監督）が、「広島・長崎への原爆投下は必要なかった、ただソ連の参戦による、米側の優位性をつくるために投下したのだ」と、そして「日本国民は（昨今の政治情勢をも含め）もっと怒るべきだ」とも語られました。

2 日目は分科会やひろばフィールドワークに参加。3 日目は参加者全員で三菱電機慰霊碑墓参をして、閉会総会（会場：県立総合体育館）、この後、爆心地公園までの 1,2Km を平和行進。原爆投下時刻 11 時 2 分（サイレンを合図に）1 分間の黙とうをし、12 時 30 分まで「長崎原爆資料館」を見学し帰路となりました。

帰りのバスでは参加者から感想を報告いただきました。特に多くの皆さんから聞かれたのは「高校生1万人署名活動」と「高校生平和大使」の活動、広がり「鹿児島でもできないだろうか」

という声と同時に、若い人たちへ運動の輪は広がっているのを感じた、との感想。フクシマの現状を聞いて、「やっぱり川内原発が気になる」と言った不安も語られました。

### 《参加しての感想》

今回7人の方から長崎大会に参加しての感想(文)を頂きましたので、以下に掲載します。

#### 吉之元海有さん(中学1) ⑧分科会 『見て・聞いて・学ぼう「ナガサキ」』に参加して

私は、映像を通して原子爆弾のこわさをしました。最初、原爆がおちた直後の写真がでてきました。道にゴロゴロと死んでいる、たおれていたり、必死になって水をのむ人の姿が目にはやきつきました。皮ふが真っ赤になり、手がなくなっている人々もいました。すごく心が痛みました。自分ももしここにいて家族をなくし、自分がボロボロになるのならば、はじめから生まれなかった方が良かったかと思うかもしれません。子どもたちはまだ生まれて数年なのに命をおとしていました。

私たちはこれから未来を受けつぐ人間となります。核も原爆も「もたない・つぐらない」そんなことを世界中が守ることで少しでも平和が生まれると思います。また、世界でゆいいつの被爆国である日本がこれから原爆のおそろしさを伝えていくことも必要だと思います。そしてこれから平和な日本を築くために、自分も日本国民の一人として原爆についてもっと深く学んでいきたいです。(原文のまま)

#### 大宮司道彦さん(かごしまフォーラム) ③分科会 『平和と核軍縮1』に参加して

4年ぶりの参加。若い仲間が「3日連続年休は厳しい」ということで参加することになった。高校生1万人署名活動・平和大使の活動を見て運動が確実に引き継がれていることを実感した。「核

と人類は共存できない」、現在ある核廃棄物・プルトニウムをどうすれば良いのか? 学習の場になった。結論、これ以上作らなければよいのだ!(要旨)

#### 北 靖恵さん(県職労) ⑥分科会/ヒバクシャ2・『学習・交流編～強制連行と被爆を考える』

被爆者の約1割は強制連行された朝鮮人である。長い間、日本政府からの被爆者援護は除外された「差別の歴史」を知った。在外被爆者排除通達の廃止を訴え裁判闘争をたたかい、勝利した郭貴勲

さん(カク・キフン)の話には圧倒された。高實康稔さん(長崎大学名誉教授)は、「被爆者への差別、戦争責任を認めない日本政府の姿勢」を厳しく糾弾されたのが印象に残った。(要旨)

#### 大山正一さん(二世の会会長) ⑦分科会/ヒバクシャ3 『学習・討論編～被爆二世・三世問題を考える』

二世組織が広がらない? 「差別・偏見」に親が懸念を示していることもあるが、援護施策がないのも大きな要因である。厚労省交渉・院内学習会等を継続していくなど着実な歩みを継続してい

たい。今回は、二世と被爆者との共同行動の重要性の意見が多く出されたことは大きな前進と思う。(要旨)

西上床キヨ子さん(県被爆協・会長) 『被爆者との交流・施設訪問(かめだけ)』

被爆者特別養護ホーム「かめだけ」訪問で、鹿児島からも持参した慰問品の贈呈、入所者3人から被爆当時の状況が克明に語られ、改めてその後を含めた苦勞を知りました。先の大戦で国内のみならず、アジア諸国を含め多くの国の人々を殺し、傷つけておきながら、原発の再稼働や原発輸出と、利潤追求のためには性懲りもなく、・・・私は「平和の灯」を消さないでいきたいです。(要旨)

10人増え25人になったことを発表しました。このような患者はこれからも増えると考え、新たな基準での認定と支援が必要です。

鹿児島市立病院労組 大田竜士 『原水禁世界大会 長崎大会に参加して』

市立病院としても青年女性部を中心に毎年参加をし、今年も2名の参加をしてきました。

68年前、非人道的兵器・原子爆弾による惨劇は、言葉で表すことができないほど人間の尊厳を奪い尽くし、ヒバクシャは、生涯にわたって肉体的に、精神的に、社会的に塗炭の苦しみを強いられています。

そして、2年5ヵ月前の東日本大震災で私たちは自らの手で新たな被ばく者を生み出してしまいました。その事故の収束に携わる労働者の被曝も深刻です。内部被ばくは目に見えず、放射線に起因する発症なのかの判断が難しく、審査にあたっては、高度の医学・放射線学上の知識が必要になります。「福島県県民健康管理調査」検討委員会は、子どもの小児甲状腺がんの患者が6人増え18人に、小児甲状腺がん疑いが

このような状況の中、新たな被ばく者や悲劇を生まないためにも原発の即時停止と廃炉へ向けた取り組み、再生可能エネルギーへの転換が必要だと思います。

今回で第16代となった高校生平和大使も「私たちは微力ではあるが無力ではない」という思いで核廃絶へ向けた取り組みを続けています。

被爆者が平均75歳と高齢になり、少なくなっている中、私たち青年女性部としても見て・聞いて学び、核も戦争もない社会を目指した取り組みをしていかなければならないと思います(要旨)。

鹿児島市立病院労組 助産師 久保綾乃 『原水禁世界大会・長崎大会に参加して』

鹿児島市立病院に入職し、ハイリスクの妊産褥婦や新生児へ看護を提供する中で日々医療機器を扱っています。特に3階東病棟・MFICUは緊急入院や母体搬送が昼夜問わずあり、搬送到着時には、妊産褥婦の現在の状態を知るために、検査や処置などで患者の安全を確保しながら、多くの医療機器を同時に扱います。そのため、安定した電力供給は必須であり、電力が不足しては、安全な医療を患者へ提供することが困難となると感じていました。

しかし、2011年福島県で起きた福島第一原発事故をきっかけに原子力発電による電力発電はとても危険なものであると再認識され、他の代替可能なエネルギーによる電力発電が求められています。でも、それらだけでは電力不足になるのではないかと考えていました。

今回、原水禁長崎大会に初めて参加し、原爆

によって被災した方の体験、原発震災によって被災した方たちの実情を聞くことや脱原発を目指して世界ではたくさんの活動が行われていることを知ることができました。開会総会では、原爆被災したことで放射能による身体障害が日常生活に強く影響を与えていることや、被爆者から原爆投下の日のことや、当時の実害写真を見ることができ、原爆がいかに恐ろしいものであるかを感じました。

大会の分科会では、日本は広島・長崎へ原爆を投下された唯一の被災国であり、福島第一原発事故による放射能の環境汚染によって事故から2年経った現在も除染作業が滞っているにもかかわらず、海外へ原発を輸出するために奔走しているということにとっても驚きました。また、福島原発事故前から自然エネルギーによる電力発電へ向けた動きがみられ、2010年の時点で世界では原発による発電量と、風力・太陽光・水



済成長期の1956年に、沖縄の田畑や街をつぶしながらやってきました。沖縄に安全保障の矛盾点が集中したのです。

### 米軍が民衆のために？

沖縄の海兵隊は6ヶ月のローテーションでフィリピンやグアムを回っていることもご承知おき下さい。フィリピンやタイで行う歯科検診などの民生支援を海兵隊は「テロとの戦い」と呼んでいます。この様な医療ボランティアによって「テロリスト」にリクルートされそうな若者を引き留めようとしているのです。インドネシアはイスラム圏なのでアメリカには厳しい見方があるのですが、アチェ州の地震のとき災害支援を行った結果、アメリカへの好感度が大きく上昇しました。

### 在日米軍の抑止力はあるか

さて先ほどの海兵隊のローテーションですが、実際にはフィリピンやオーストラリアをぐるぐる廻っているわけですから、沖縄に常にいるとは限りません。つまり海兵隊はいないのだから日本の防衛には役立たないことが多いといえます。それなのになぜ沖縄なのでしょう。沖縄が中国の南洋進出を抑える位置にあると自民党は言っています。しかし海兵隊は海の上では戦争しませんので、中国の海洋進出を抑える力はありません。最近はおspreyが尖閣防衛に役立つという話があります。しかしosprey 24機が運べる兵士は576人に過ぎず、尖閣諸島防衛に役立つかわかりません。しかもospreyの航続距離を考えると、むしろ沖縄に駐留するより九州のいずれかにおいたほうが、中国や北朝鮮への抑止力になるのではないのでしょうか。抑止力がいわれます。抑止力は戦争になったそのときだけ効果のほどが分かるといいます。そして相手が冷静であることが必要です。相手が訳の分からない状態で抑止できるわけがありませんので。そう考えると「北朝鮮は何をやるかわからないから、抑止力が必要だ」という議論

は成り立たないことが分かります。このような理屈で沖縄に米軍基地を縛り付けているのが日本という国の状況なのです。

### 基地問題は国内政治問題

軍隊の責任は政治の責任です。これが国内では全く議論されていません。外国の軍隊をいつまでも日本国内に置いておくのかということに関しても全く議論はありません。実際にはアメリカと中国は軍事的にも、そして経済的にも強く結びついています。本当の意味での対立などあり得ません。2009年に中国漁船との衝突問題がありましたが、アメリカの高官は「日中の武力衝突などあり得ない。双方熱くならないよう願っている」とコメントしました。このような状況ですが、一つ解決策を提示したいと思っています。先に述べたように、海兵隊はアジア太平洋地域をローテーションして訓練を行い、プレゼンスを明らかにしていますが、このローテーションにおいて沖縄を中心にしないで欲しいと思います。

### イタリアは主権侵害を許さない

もう一つ、主権をはっきりさせ、アメリカ軍を駐留させている国のことをお話ししたいと思います。イタリアもバルカン半島を臨むアヴィアーノという地区に米軍を駐留させています。この航空基地の司令官の一人はイタリア人です。沖縄では米軍ヘリが墜落すると米軍が大学キャンパスを占拠する事態が起きました。同じ敗戦国イタリアも戦後、米軍が駐留し、軍用機の事故が起きると、イタリア当局は証拠品である米軍機を差し押さえ、パイロットを尋問し、独自に捜査しています。イタリア人は主権が侵される行為を許しませんでした。翻って日本では米軍基地とのかねあい、首相が替わっています。この違いは何でしょうか。このような他国との比較で日本、沖縄の米軍基地の問題をみなさんにも考えていただきたいと思っています。

### 講演会の全体風景









